

## 時代の流れと授業の本質

次長 岸 健一郎

令和4年度も残すところわずかとなり、各学校においては、年度末の行事（卒業式、修了式など）の準備、各種事務整理、次年度の教育課程編成作業等で慌ただしく、忙しい毎日をお過ごしのことと思います。今年度も、皆様の御尽力によって下北管内の子ども達が明るく素直に成長していることに対して改めて感謝申し上げるとともに、今後も御指導をよろしくお願い申し上げます。

さて、今年度の所長訪問においては、各学校でお忙しい中にも関わらず、日程調整、資料準備、当日の対応など本当にありがとうございました。訪問では、授業参観や話し合い等で各校の様々な教育活動や取組を直接肌で感じ取ることができました。特に、GIGAスクール構想を受けて1人1台端末の利活用や校務デジタル化などに前向きに取り組んでいることが伺え、時代の流れを感じました。具体的には、授業（大型提示装置での資料提示、朗読・範読、調査、児童生徒の意見集約、オンライン授業、ドリル学習、遠隔地との交流授業）、児童生徒とオンライン通話、集会時のデジタル資料配付、家庭学習の課題などでの活用が挙げられます。加えて、各学校における校務デジタル化について説明があり、アンケート集計、児童生徒の欠席連絡の集約、デジタル資料での会議など働き方改革につながるものが多く、工夫や改善を理解することができました。これらは一部に過ぎず、今現在もICTを活用して児童生徒の興味・関心を高め、楽しく分かりやすい授業や業務の効率化につながる新しい取組が日々実践されていると思います。

その所長訪問の期間中に、偶然見たテレビのニュースで、次のような実践が紹介されていました。他県の小学校における体育の跳び箱の授業でした。児童が自分の課題である段数の跳び箱の後方で、机上に置かれたゴーグル型の箱の中に取り

付けられた端末を覗き込み、それを見てVR（仮想現実）を体験する取組でした。実際に児童が目にする映像は、「自分が跳び箱に走って近づき、跳び箱上部に示された手を着く場所の目安（黒い両手のマーク表示）に着手した後、まるで跳び越えたかのように浮遊感、滞空時間、踏み切るタイミングを感じとることができるものでした。それを見た後で、今度は実際に映像の体験のように跳び箱を跳び越えたり、失敗したりした後で、再び端末の映像を見直して跳び箱に挑戦する、これを繰り返して児童一人一人が主体的に個別の課題に取り組んでいました。その様子がとても画期的で驚きましたが、現在、全国で多くの学校が最新のICT活用に取り組んでいると思います。

最後に、自分はこれまで中学校で理科教員として授業を行ってきましたが、ICT活用に関して、いくつかの気付きがありました。一つ目は、自分が授業の中でタブレット等を活用するのであれば、グラフ作成、映像・動画での実験手順の説明及び実験経過や結果の記録、生徒の理解を深めるアプリの活用などを実践してみたいと考えたことです。もう一つは、授業において「既習事項の復習として実験結果を提示する」「失敗した実験結果を修正するために資料提示する」など、補足・時間短縮のための活用は良しとしても、「時間的、物理的にも準備をすれば実験できる内容をICTを活用した演示実験で済ませることは、気を付けなければならない」と自戒の念をもちました。当たり前ですが「ICT活用は、方法・手段であり、目的ではない」が重要だと考えています。どのようにICTを活用すれば児童生徒の学びの充実につながるかなど、「授業の本質」を問いながら、日々の教育活動に反映させていくことが大事であると考えています。

# 欲していただけることのありがたさ

主任指導主事 鎌田 悟

## 1 計画訪問等の背景

私たちが学校を訪問できる機会は限られます。計画訪問や要請訪問、そして随時訪問です。計画訪問は必ず実施していただく訪問であり、学校側が欲しているわけではありません。教育事務所が訪問をお願いするため実施していただいているものです。そこには学校側のニーズが特にあるわけではありません。学校が望もうと望まないと実施する訪問となっています。要請訪問の場合は、計画訪問に比べれば多少ニーズがある状況です。

## 2 随時訪問の状況

しかし、随時訪問は、違います。何らかの形で学校がニーズを感じてくださるからこそ実現する訪問です。各校のニーズがなければ、訪問回数が0回になることも考えられる、そんな訪問なのです。

今年度、随時訪問が、のべ54回となりました。昨年度と回数はほぼ変わらないものの、感じる変化は、「依頼内容の多様化」です。その内容を御紹介します。

- ・授業への助言
- ・要請訪問に向けた指導案作成における関わり
- ・評価計画の作成についての校内研修
- ・教育相談についての校内研修
- ・不登校についての校内研修
- ・学級活動についての校内研修
- ・複式学級における授業づくり
- ・避難訓練における児童への講話
- ・外国語科等の模擬授業
- ・支援を要する子どもについての相談
- ・情報モラルについての講話
- ・初任者研修の代替実施
- ・参観日での講話 等々

依頼をいただいた指導主事は、学校のニーズに添えられるように準備をして当日を迎えますが、必ずしも満足していただけるわけではありません。申し訳ないと心の中でつぶやきつつ、帰路に

就くこともあります。

ただ、随時訪問のように、学校がニーズを感じ、私たちが来校させていただくこの訪問は、計画訪問とは違う、大切なものを感じます。こうした形のやり取りを充実することができれば、学校と行政がWin-Winの関係で繋がるができると思うのです。手軽に先生方のニーズに応える機会を増やしていきたいと思うのです。

## 3 次年度の事業展開

これまでの随時訪問に加えて、疑問や悩みが生じたそのときに、手軽に質問できる体制を充実させたいと考えています。かといって、下北教育事務所に質問の電話をするのは気がひけるかもしれません。

そこで新たな取組として考えているのは『オンライン「授業質問箱」』という企画です。事務所がラインセンスを保有するZoomか、Googleミートを利用してオンラインでつなぎ、先生方と担当指導主事が顔を合わせて授業づくりに関する質問等について対話をするイメージです。次のような手順で進める予定です。

- ①管理職に確認後、指定された申込みフォームに、所属校、お名前、質問等を入力・送信。
- ②担当指導主事から教頭先生へ受け付け完了の連絡と、オンラインで対話をする日時等の検討・決定。
- ③オンライン質問（対話）の実施
- ④相談者が、オンライン「授業質問箱」についてのアンケートフォームへ入力・送信
- ⑤アンケートを基にした運営の改善

先生方は、今も様々な課題に向き合い、様々な疑問や知りたいことを抱えていることと思います。その中から、下北教育事務所がお手伝いできることについて、一緒に取り組んでいきたいのです。

今後、検討を重ね、実現の御報告ができればと思っています。利用件数が1件でもあることを夢見て、計画の具体化に取り組んで参ります。

# 命を守るための学び、未来への備え

社会教育主事兼指導主事 佐藤和也

「子ども達の笑顔を守りたい。」

「命を大切に、健康な人生を歩んでほしい。」

これらは先生方が共通に抱く願いであると思います。そのような中、先日トルコ・シリア地震が発生し多くの尊い命が失われました。子ども達の笑顔が奪われ、胸が強く痛みました。

災害大国・日本に暮らす子ども達のため、また体力の低下や肥満、心の問題など多くの健康課題に直面する子ども達のために、今こそ「未来への備え」として健康・安全に関する教育の充実を図る必要があると感じています。

さて、管内の健康・安全教育の推進を図るため、むつ市立大畑中学校、むつ市立川内小学校に実践研究をお願いし、2年間にわたり学校の課題解決に取り組んでいただきました。多くの成果、価値ある実践がありましたので御紹介します。

## 健康教育実践研究支援事業 むつ市立大畑中学校

研究テーマ「自己の生き方について、自分で考え、行動を選択できる生徒の育成」

実践内容として、生徒会策定の「Ohata Style」に基づいた生活習慣改善のための生活記録の記入、がん教育をはじめとする各種講演会の開催、保健委員会の活動と連動した歯科保健指導の実施、学校医・大畑庁舎保健師・PTA 会長等の参画による学校保健委員会の充実等に取り組みました。中でも特筆すべきは、「命の学び」全体計画の推進です。全学年の総合的な学習の時間に「命の学び」を位置付け、各学年のテーマに沿った学習を系統的に実施していました。(例：1学年テーマ「命の始まりについて考え、これからの自分について考えよう」赤ちゃんお世話体験の実施、等)

目指す生徒像を基にカリキュラムをデザインし、健康に関する意識調査を定期的の実施しPDCAを回しながら取組の充実を図る実践は大変参考になるものでした。

## 命を守る！防災教育推進事業 むつ市立川内小学校

今年度の地域と連携した防災訓練テーマ

「児童に考えさせる避難・防災訓練」

命を守る行動を主体的に考える機会にしたいという願いから、避難経路が落下物により狭められた状況や、担架搬送、肢体不自由者等の避難により避難経路が渋滞する状況等を意図的に作り出していました。また、地震発生後にすぐに津波警報が発令されたことを想定し、グラウンドへの避難を止め、直接校舎3階への垂直避難にも取り組みました。このように避難想定を工夫したことにより、振り返りではいつも以上に多くの気づきが発見されていきました。当日は、昨年度も参加した自主防災組織や行政職員に加え、保護者や消防団、学校運営協議会の方々も参加し、学校と連携した地域防災の必要性を実感していました。次年度以降も地域と連携した防災訓練や危機管理マニュアルの見直し等に取り組むため、新たな校内組織として「小中合同防災委員会」を立ち上げるとのことでした。

学習指導要領総則の「(3)健やかな体」には、健康・安全に関する資質・能力の育成のためには体育科・保健体育科(保健)や特別活動の時間はもとより、各教科、道徳科、総合的な活動の時間などにおいても特質に応じた指導を行うこと(教科等横断的な視点に立った指導)、加えて、家庭や地域社会と連携を図ることが記述されています(内容を要約)。これらのことから、御紹介した2校の実践が価値あるものであることを御理解いただけるのではないのでしょうか。

健康・安全教育を推進する際の拠り所は、各校の「学校保健計画」「学校安全計画」「危機管理マニュアル」です。計画に基づいて組織的に実践し、内容を見直していくことが充実へとつながっていきます。文部科学省では令和3年6月に「学校の『危機管理マニュアル』等の評価・見直しガイドライン」を発行し、実践的・実効的な避難訓練の想定や危機発生時の対応などを具体的に提示しています。校内研修等で活用できる資料です。

子ども達の笑顔を守るため、健康・安全教育の充実に取り組んでみませんか。

# 言葉が通じる喜びを味わわせたい

指導主事 猪口 優野

私が中学2年の頃、当時はまだ訪問が珍しかったALTが来校し、英語の先生が「好きな有名人について発表しましょう」とおっしゃいました。私は日本の有名人のことを発表しても分からないだろうと思い、音楽の授業でみた「サウンド・オブ・ミュージック」というミュージカル映画の主人公だったジュリー・アンドリュースさんについて、「彼女はアメリカでとても有名だと思うけれど、ロイ先生は彼女のことを知っていますか」と発表しました。すると、彼がニコニコしながら、「知っているよ」と答えてくれた時、「私の英語でも通じた！」ととても嬉しかったことを覚えています。また、原稿がなくてもスラスラ英語で話したり、字幕がなくても英語のセリフが理解できたりしたらどんなに素敵だろうとも思いました。その後何年も英語を勉強しましたが、当時思い描いたレベルに達するのは難しいです。でも、あの時感じた「言葉（外国語）が通じる」喜びを何とか子ども達に味わわせたいと思っています。

さて、今年度、英語教育充実支援訪問（随時訪問）として小学校へ6回、中学校へ10回程行かせていただきました。また、要請訪問も含め、先生方の素晴らしい授業実践を沢山拝見しましたので、その中から中学校の実践について、ほんの一部を御紹介したいと思います。

東通中学校の鎌田幸子先生の授業では、「村在住の外国人技能実習生に、日本文化や郷土芸能などを紹介するパンフレットを作ろう！」を課題に、「書くこと」の授業を参観させていただきました。インドネシアからの技能実習生のウスさん、フランシスカさんに向けて、子ども達は、「お正月」や「東通牛」などをどういふふうにかいたら理解してもらえるのか試行錯誤する様子が見られました。中には日本語のオノマトペについて紹介する生徒もいるなど、そのチャレンジ精神に驚かされました。

また、今年度、県英語教育推進教師育成研修会に参加された、田名部中学校の福士絵莉香先生の

授業では、「英語で校内ポスターを書いて教室に掲示しよう」を課題に、生徒がタブレットを使ったポスター作りにチャレンジしていました。タブレットを使うと、写真やイラストをすぐに貼り付けることができるので、子ども達は授業で習った命令文とともに、好きな写真を使ってポスター作りを行っていました。

同じく上記研修会に参加されたむつ中学校の米沢真輝先生の授業では、授業の9割を英語だけで進められていることに感心させられました。内容がエネルギー資源（NEW HORIZON 3 Let's read 2 Power Your Future）を扱っていたので、英語だけで進めるのはかなり難しいのではないかと予想していたのですが、パワーポイントを上手く使いながら子ども達を巻き込み、Which resource is the best?（どの資源が一番良いかな?）と問いかけ、考えさせていました。また、以下のようなGoogle Formを使った単語の確認も、クイズ形式で楽しみながら取り組めるので参考にしたいと思いました。

What is "electricity" in Japanese?

- |                          |                          |
|--------------------------|--------------------------|
| <input type="radio"/> 電気 | <input type="radio"/> 電池 |
| <input type="radio"/> 元氣 | <input type="radio"/> 電流 |

このように、先生方が「身に付けた知識・技能を実際のコミュニケーションにおいて活用させる言語活動」に取り組んでいらっしゃいます。また、小学校でも教科書を上手く使いながら、単元を通してねらう内容のまとめ（5領域）を明確にして授業をされる先生が増えてきました。

国土交通省の資料によると2065年には、「外国に由来する人口」が日本の総人口の12.2%を占めるようになるそうです。相手が外国人でも臆せず自らコミュニケーションをとり、言葉が通じる喜びを感じられる、そんな子ども達を先生方と一緒に育てていきたいと思っています。

※外国に由来する人口＝在留外国人に帰化人口と国際児（外国籍の親を持つ子）人口を加えたもの

# 生徒指導提要の活用について

指導主事 川島 学

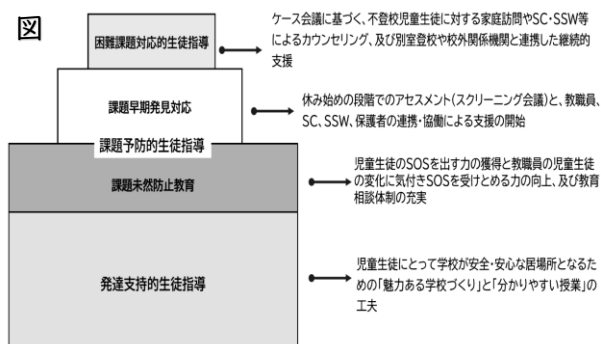
令和4年12月に「生徒指導提要」が12年ぶりに改訂されました。改訂の背景には、作成されてから10年以上経過しており、生徒指導を巡る状況が大きく変化したこと、近年、いじめの重大事態や暴力行為の発生件数、不登校児童生徒数、児童生徒の自殺者数が増加傾向にあるなど、課題が深刻化していることがあります。

生徒指導提要は、生徒指導の実践に際し、教職員の共通理解を図り、組織的・体系的な生徒指導の取組を進めることができるよう、生徒指導に関する基本書として、小学校段階から高等学校段階までの生徒指導の理論・考え方や実際の指導方法、個別課題への対応等について網羅的にまとめたものです。

改訂の基本的な方向性としては、「積極的な生徒指導の充実」「個別の重要課題を取り巻く関連法規」「学習指導要領やチーム学校等の考え方の反映」がされている点です。ページ数が多いのは、関連法規や基本方針等、学校の組織体制と計画、未然防止、早期発見・対応、関係機関との連携でまとめられており、具体的な対応が挙げられているためです。

第Ⅰ部総論と第Ⅱ部各論で構成されており、第Ⅰ部では「生徒指導の基本的な進め方」について、生徒指導の定義や目的、生徒指導と各教育課程の関係性、生徒指導を支える組織体制について解説されています。第Ⅱ部は、「個別の課題に対する生徒指導」について、各課題ごとに章立ててあります。改訂版生徒指導提要では、生徒指導の重層的支援構造が示されており、いじめ、暴力、自殺、中途退学、不登校、性に関する課題では、対応が示されています。

下北管内では、不登校児童生徒数の増加が課題の一つです。特に新規出現数の予防が重要になってきます。改訂版では「積極的な生徒指導」＝「未然防止」に重点が置かれているため、重層的支援構造で言う「発達支持的生徒指導」「課題未然防止教育」が大切になってきます。次の図は、提要P



229に記載されている「不登校対応の重層的支援構造」です。例えば、発達支持的生徒指導では、(1)「魅力ある学校づくり・学級づくり」(2)「学習状況等に応じた指導と配慮」となっており、それぞれに具体的な取組も書かれています。法令の解釈から始まり、支援の方向性、組織体制と計画、重層構造による指導内容、関係機関等との連携と丁寧に説明されています。特に関係機関との連携について、分からないことが多いと思いますが、細かな部分まで、多岐にわたって書かれています。これは不登校に限らず、全ての課題について同様の構成で書かれており、生徒指導上の課題に対する基本的なマニュアルとしての活用ができます。また、校内研修や職員会議等において活用することで、先生方が生徒指導上の課題に共通認識をもって取り組むことができます。

最後に、改訂版生徒指導提要がデジタルテキスト形式で発表されたことによって、先生方が活用しやすくなりました。また、保護者、各関係機関、医師、弁護士、学生など、広く見てもらいたいという意図もあります。令和5年4月から「こども家庭庁」が発足し、子どもの権利に関わる法令等の理解が必要になってきます。保護者にもそのことを周知して頂くためにも、参観日、通信等で「児童虐待」や「多様な背景を持つ児童生徒への対応」の部分を紹介していただきたいと思います。法令等を根拠とした共通理解は、先生方自身を守るためにも必要です。まずは学校で活用してみましよう。

# 単式にも通じる複式指導

指導主事 新松 美代子

少し前になりますが、令和4年6月24日、むつ市立正津川小学校で複式学級担任者研修会を開催しました。授業に先立ち、皆川洋介教頭先生から教育課程の工夫や校内研修の取組について説明していただき、その後、筒井直子先生から第5・6学年の算数科学年別指導の授業を見せていただきました。学校として「少人数」を利点と捉え、それを最大限に生かしている授業実践でした。ほんの一部ですが紹介させていただきます。

## 【実態把握に基づいた授業づくり】

筒井先生の指導観に感じたのは、“きめ細かな指導”です。「5年生の児童は、4年生の複合図形の面積で分割する方法を見いだせた。立体でもその考えが出るかも知れないが式が複雑になるため、図と式と言葉を繋げられるよう支援したい。だからこの場面は5年生の“直接指導”に。」こういった先生の意図がありました。「ずらし・わたり」を決めるより先に児童の実態に寄り添う先生の姿勢があったということです。また、「何か使いたいものはありますか」と投げかけで自己決定させたり、「今日のゴールは何だろう」と児童自身に授業の最後の姿を語らせたりしました。本授業に見た“きめ細かな指導”は、的確な実態把握に基づく“支援しすぎない支援”でもありました。

## 【学びの土台としてのICT活用】

本授業では、以下のようなICTの活用場面がありました。

- ① 学習問題を把握する場面で大型画面を活用し求め方の見通しをもたせた。
- ② 自力解決及び確かめる場面でJamboardを使って考えを共有し、話し合わせた。
- ③ 大型画面に児童が各自タブレットで撮影したノートを映し、説明し合わせた。
- ④ 他の考え(方法)に触れさせるため、タブレットを使って説明動画を見せた。  
文房具のように、手段としてICTを使うこと



の大切さが言われますがまさにそのとおりでした。学習に必要な文房具（ICT）を使って、視覚的に捉え、考え、語り、判断する。こういった児童の姿がありました。

## 【『多様な考え』に対する捉え方の工夫】

学級は5年生が1人、6年生が3人という構成です。1人の場合、どうやって多様な考えに触れさせればよいのでしょうか。とにかく「多様な考え」を量的に捉えがちですが、必ずしもそうではなく、「ねらいに迫るために必要なものの方・考え方・感じ方」といった視点で捉えることが大切で、筒井先生の授業にそのヒントがありました。

それは前述の④「説明動画」です。現6年生が5年生で学習した時の考えをタブレットで撮影しておき、その動画を5年生の児童に見せ、自分の考えと比較させていました。同じ“5年生”との対話の実現でした。筒井先生の「多様な考え」に対する捉え方の工夫によりできたことです。

## 【参加者の感想】（一部御紹介）

○授業を単式として見ても素晴らしかったです。

ICTの使い方、流れの提示、交流のさせ方、先生の言葉がけ等全てが参考になりました。

○子ども達が自分で考えたり、自己決定したり、子どもの良さを引き出している授業だと感じました。少人数での対話の在り方を考えることができました。複式という複雑な授業の中で、子どもが活躍していました。



## 【終わりに】

授業後の協議では、参加者の皆様からたくさんの感想や意見が出され、有意義な研修会となりました。改めて、貴重な提案をしてくださった正津川小学校の先生方に心から感謝申し上げます。

本研修会は「複式学級担任者研修会」ですが、単式の学級にも通ずる指導技術を学ぶことができます。ぜひとも、単式学級担任の先生方にも御参加いただければ幸いです。

# 道徳教育研究協議会を終えて

指導主事 増山雄宇

新型コロナウイルス感染症に対する不安がある中でしたが、令和4年度は小・中学校道徳教育研究協議会を2日間無事に開催することができました。1日目は、文部科学省教科調査官の浅見哲也氏から講義をしていただき、2日目は、会場校であるむつ中学校の多大なる御協力のもと、2年生と3年生の授業を公開していただきました。2日間とも大変実りのある、有意義な研修会となりました。簡単ではありますが研修会の様子を紹介させていただきます。

## 【浅見哲也調査官による講義】

浅見調査官には、オンラインにより、「子供が自ら考えたいくなる道徳科の授業づくり」という演題で、道徳教育の要となる道徳科の授業づくりについて講義をしていただきました。道徳科における「主体的・対話的で深い学び」、つまり「考え、議論する道徳」の授業を実践するために意識しなければならないことやICT端末の効果的な活用等について、実際の授業の様子を例に、分かりやすくお話していただきました。参加した先生方からは、「深い学びに迫る発問について考えることができ、勉強になった」、「目の前の生徒達と授業を深めることにチャレンジしていきたい」という前向きな感想が寄せられました。現在でも道徳科の授業を実践されている浅見調査官のお話は、今後の道徳科の授業づくりに生かすことができる有意義な内容でした。

## 【むつ中学校における公開授業】

公開授業に先立ち、道徳教育推進教師である領毛律子先生から、むつ中学校における道徳教育の取組についての説明がありました。別葉を見やすい形に改め、道徳科の授業と各教科、特別活動等との関連を分かりやすくしたり、道徳科の授業の板書を撮影し保存したりするなど、学校全体で道徳教育を推進している様子を窺うことができました。参加された先生方からは、むつ中学校の別葉の様式を参考にし、自校の実践に取り入れていきたいという声がありました。

工藤希先生による2年生の授業は、内容項目「思いやり、感謝」を取り上げ、さりげない善意や思いやりによって支えられ、守られていることに気づき、それに感謝し、伝えようとする実践意欲を育てることをねらいとした授業でした。ねらいに迫るために、Jamboardを用いて、生徒一人一人の考えを可視化、共有化する工夫が見られました。



工藤康敬先生による3年生の授業は、内容項目「生命の尊さ」を取り上げ、自他の生命を尊重しようとする心情を育てることをねらいとした授業でした。ねらいに迫るために、「心の数直線」というアプリを用いて、臓器提供についての自分の考えを数値で表した後、ギャラリーウォークで他の考えを見て回り、臓器提供に対する立場を変えて考えたりすることで学びを深めようとする工夫が見られました。



お二人とも、それぞれの授業のねらいに迫るために、発問の流れや中心発問、深く考えさせるための展開を意識するとともに、ICTを活用した授業を公開してくださいました。お忙しい中、協議会に向けての準備を進めてくださったむつ中学校の先生方に心から感謝いたします。

## 【終わりに】

本協議会をはじめ、今年度訪問等で拝見した道徳科の授業では、子ども達によりよい生き方について考え、深めさせるために、指導方法や発問を工夫されている先生方の姿を見ることができました。今後も、これまでの研修の成果を生かすとともに、来年度の下北の道徳教育の重点を意識し、「考え、議論する道徳」への転換を図っていくためのお手伝いをさせていただきたいと思っています。